關公奮奇俠客傳 第四集

122
25
15

開春藝驚奇俠客傳

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	三架	六口號	二五冊

22
25
15

曲亭翁 印度異獸夜分圖 蘭吽ロイアールト
編演
開巻驚奇
侠客傳第四集

二世 柳川重信画
書林 聲玉堂精刊

TOKIO LIBRARY

侠客傳第四集引

中納言藤房卿。遁世以後事。太平記天正本。及吉野拾遺粗載之。然而所履歴未詳。参考太平記天正本。曰。藤房遁世ノ後。朝廷弥危キニ近カラントスルコト多ケレバ。天下又静ナラス。此人終ニ散聖道人ト成テ。侃山子トツ申ケル。江湖遍参シ玉ヒシカ。土州下向ノ時。船中ニテ風波ノ難ニ侵サレ。帰泉シヌルコソ哀レナレ。吉野拾遺ニ云。刑部卿義助朝臣の。越前國より来まゐり物かたりに。あちせんの国たゝれを山いでゝくそいでゝ。城郭ニ来るべき処なりければ。六郎左衛門時義とらふのよまのゝくせけるよ。あるいを。きゝんあるゝ。後おくふくゝけ入りけるよ。谷川のいとしよくゝられけるよ。そのみるゝをとゝろの。岩とかゝとりて。松の多ふうゝ。ぬれたる庵のそえけるを。かる処ゆも住む人の有りけるゝ。やとゝちよりそこ。ゝ。ゝれば。木ゝ葉を。あつめてむりろとゝ。ゝひゝゝゝる石の上ゝ。法華経と置ゝけるゝ不ゝゝゆハ。何もとゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝけるよ山路をたとゝ来るゝとゝれい。ゝゝゝ

かつてくさぶくと藤房卿の御面影ばかりとのみひとりまもりけるが庵はそのまゝあれくて僧はいづくへ行るとも経のありつる石とをとこそ
ものもまことに世の人はとひそれはそもくく雲とやとのとあてんとうたつけのる筆はあとをおもはのくくとあるのひくくそのあとの山々とゝるさせのひけれとも文よりとをとゝめるくくとのくまひ
あとと人々はものあはせ涙落くけるかもいみ〳〵かりける人の世〳〵とのはるひハ誠よるくくとをたに
心よりそ年月とあはせくくとゝ侍るよ君ゝまむ宿とゝひとされハ後のゆゝ越のくくとゝ侍るはうへ通り
ゆくくんわるゆゝ其後ハ絶くゆゝとうれもゆゝとくくゝ此藤房ハ大納言宣房の子ゆゝ才智世ゝ
ゝとれ給ひくく君ゆゝ御ゝ不ゝ滅くくゝ中納言ゝくくゝ成ゆひ〳〵ゝ建武ゝくのゝ成の春ゆゝくくゝ
世と捨ゆひゝ次の段ゝ又云おれ〳〵ゝくゝ大納言実世卿のゝくくゝくゝのゆくくくくくゝ
ゆゝくくくくゝけれハ　君くゝまむ宿のゆくくをゝくくれハむくくくゆゝくゝ墨くくくの紬とゆくくくくゝ
くゝ跡ゆゝむくくくゝかくくゝゆゝおくれとゆくくくくゝゆゝくくゝ墨くくくくの紬とゆくくくくゝ
野くゝ出くく草くくかくくゝゆゝくくゝゆゝくくくくく

開卷驚奇俠客傳第四集總目録

壹卷

第三十一回　以毒製毒造化小配劑　臨機應變奸賊投名狀

第三十二回　暴論勵親雷九郎撈龍潭　夜察殺氣姑摩姫夷羣虎

貳卷

第三十三回　姑摩姫莎庭斬四賊　復一郎後門逞石技

第三十四回　投名悔荷二郎陷同惡

參卷

第三十五回　柱主婦筆柿分贓財　誅殘盜就盛置放免

參卷

第三十六回　滿家二旋密策　楠女前知得失

第三十七回　假密使雙傳令旨　楠女俠明辨玉石

四卷

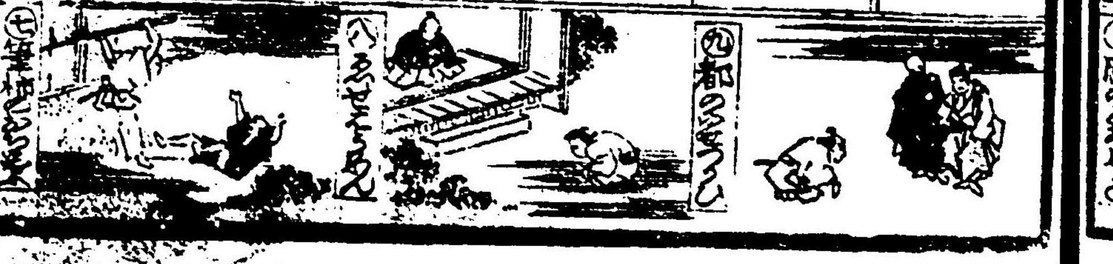
第三十八回　持永借山眷恋姑摩姫　正直稟囑漫做月下翁

第三十九回　女俠購死猿擬駿馬骨　心猿發狂大徵艾苺黨

五卷

第四十回　隱形術豪袁救長總　如醴交泰勝結荷二

總目録終　本集話説起庶永十八年壬寅平九年冬十二月其三十一回已上総目録見第三集首卷



誰到彼岸河海
地上風波
心言不亂
著作堂
捕使殺
手作
賢蜱
垣衣鶲

月浅蝶子
あもまる
花ゆるゆるむ
はるかなる我
夏の世とも
さとる
雕窩老
畠山左馬介持永
篠持蝶与
猿彦二郎

殘忍虎狼心
穿窬老鼠牙
雷水散
五十槌雷九郎
隆成
五十槌雷次
隆光
像賛第二十一

湯淺風炉八郎
敦義
雨ふれて山ろとまなる神よ
多たび耳をそばだてくれ
愚山人
掌柿小紋二
像賛第二十二

春玉堂印發

金剛禪豪袁
和尚邑中餓鬼
佞人藥裡斑貓
賴鳶齋陳人
北白田本造中將
俊雅

ゆきとろ松よ
たれらむ苔
かつらわる
くれわもをみち
ちかけり 信天翁
笹佐河内守
ちのぶ就盛

俠客傳第四集列傳追加姓名目録

又云第三集三の巻廿七の右の西紗の植長屋の元と豊死と[illegible]

將相 北白田俊雅　畠山持永

武士 湯淺風爐八郎敦義　小山岡作就安　譽田譽九郎

浮屠 齊天行者豪袁

市人 賣油郎　滕松

強人 梁渡念珠七　八艘飛魚太　筆柿小紋二

通計十名　是他有司莊客強人之姓名俠者多多有不數焉　與第一集至第三集所録列傳一百十名共一百二十名

附て曰第三集三の巻七の[illegible]像の右に復市が竹藪の内に投石の処にその人物と看官に誰と知せ。そ作者の稿本に。故意名簿を附ざるに然と何人の所為に推量とその人物の下に「三郎」と書くべし。彫刻校訂の折數に紛れて作者の心づかいなし又同巻の廿丁ウ右の五行に義滿の薨せし歳月を永十五年四月とあり四月は五月の誤まり。餘も聊誤寫の看過しあるべし。右の小夜郎と四月は堪久錯誤れば程經たりと印刷の書肆に告げて示しやすく改正せんこと既に數百揭出せり。後看官の看官に疑難もゆえん六月の菖蒲十月の菊ならんもなんぞ不已とせざるべし。

俠客傳第四集巻之一

東都　曲亭主人編次

開巻驚奇俠客傳第四集巻之一

第二十回　毒を以毒を制し造化の小配劑　機に臨み変に應じる奸賊の投名狀

再説木綿張荷二郎は那財策の計略。塚見木兎六は深痍を負て。登平樹の十々減と刺て。快く血刀を拭收め。他が腰に附ける鍵嚢と拐含て。鈎索と共侶に帯に夾て走り出て。隣なる獄舍の戸を開く。野干玉の夜の夕ゆえ。裏面に燈火と措ざるに。其首に在りとはいえども。約束なれば毫も疑誅せず。忽地聲を潛て。長総の刀自出て木兎六の方に僅結果けり。快出ぬと。いとぐーたる聲に長総ありて。応いそも今作に裏く胸を鎮めも果ず。戰く膝を踏締て。立ん遅しと荷二郎は廿舊の獄舍に入て。血に塗まれる木兎六の屍骸を指し。真に示せと。長総看て舌を吐て。呆てと半晌許。且怕れ且歎ひて。

憶ぼもうもと額に加えて。低るかに今より後の命とあん身に儘せんのみ。遮莫潜び出るに首を枷ありとも不便へせん術あるやと耳けが。荷二郎小ふりと黙頭てゆくびに腰に鍵と合き出く。那這と合ーとの長総が身枷の扁鎖と披沢合を棄て。然而木兎六が要に帯る脇掃の刀と合てその身の帯る七首とが。防御の與に長総に遮與して躍て出る折衝に木兎六がとて来ぬる張燈撲地と蹴飛せば。板壁に中とて濺と滅る島夜に紛れて共侶は塀を乗んと後門る。樹柱の方にゆく折ーとやこ子二の警言宵の雑兵二名うち連立て一個の左右に張燈と捍棒引提て出ーとこ子二個の鑢子木うち鳴らーと。夜行々々とぞ喚聲も霜天る冴ーる一字路の撞見首に荷二郎長総折ーとと思へども。避るに路もあらのーと些る怯まる無敵に本性荷二郎は長総と。後に立ーとぞ儘に遣違んとあくーと。先に找一個の雑兵怯とまるーと引提る張燈高く推抗て癖者等と叫林る息も引せも荷二郎が閃りーとる刃の電光棒と禁るるも及ばぬ憐れ雑兵の肩尖より乳の上まで砕れて苦と叫びゆ火を合る落ーたる張燈と推潰ーとぞ死でけ。是ぞ噪ぐ一個の雑兵有賊ーとと喚ーとて。鑢子木列ーくうち鳴ーと。逃んとせーと。荷二郎は血刀うち揮趕蒐て礫と撃るーる刃の牙に水も溜らぬ後頭砕られて走る五六歩。去向の石に跌て倒ーて折み撃られる首は鮮血に漬放されて一間あまり滾々と飛走ぞ落ける。低りー程に長総に今その支の為体に吐嗟とだーり駭て怕れて身を潜ーと找る既ーて雑兵们の砕仆されを透ーたる。茫然ーり顔の色も吻とつく息も冬に夜に白く倣りゆく苦中の憐れ。そぞ伏走り近着けば。荷二郎は雑兵の捍棒合れと耳に示ーてその身は躍て鑢子木と拐り合ーりて打鳴せば長総は捍棒と屋石に突响あて。那敬言宵の如くに響く。外塀まで徇る。墻と踰塀を乗るに准備の鈎索あるとて荷二郎は丹と投棋て長総と扶登ーその身は輒くうち踰るに猿猴の枝伝ふに似たり。左右あて外塀る城楼の邊に来ける。這里は石垣の高くーて輒く登るべくもあら

ぬと。荷二郎が腰に附へし赤只の鈎索のこなるを。伸せば十仞に餘る。先に扒墻索さへあるを。のして。開どうち樹々長総と。扶掖さう塀と乗て稍暫際に下立つめり。這城斬ち最廣くて。七八間もあるんと思ふ。倘一番の資と藉らざれば。いかにしても渡ぜ然いあるとも歳極の天の例よりも凍強うければ。斬の水酷く氷りて。棒もて敲くに突も破ぜず。荷二郎情々地に懽びつゝ。石を索ひて。抬起して投試るに氷い特に厚うれば。砕けぜ。打ち躍に石の前面へ走りけり。天の幇助と長総も又懽びつ棒をちらつに氷の上に下立て。荷二郎い扶掖さて。前岸に著て。造化微妙と。情語さて城と離れて。尚明ぬ。小夜の中山のなよ赴く程に四老村に来ければ。荷二郎い村盡処の孤屋の門傍に停歩て。長総に耳に。やう。我もん身も這谷を走ぶべ人に怪められて。路の難を及びせ。我自思ふ。もあれば。姑且這里に立よて。共侶に逆旅の准備とせん。身に其頭に且ちを。と真に。後方に退け。躰て這孤屋の門忙く打敲て。妖た嘯やよ。鈍梅の刀自。村長刀祢の使ふ。火速の要あり。快起ぜや。と。両三番呼覚せば。内に応と回答して連に火を鑽ち。行燈へ移して。躰て指燭して戸を開くに。鈍梅に。年は三十許の一個の漢子出て来て。真夜半に。こんに長刀祢より使ありとは何事ぞと問へば。憶ぞ灯光に面を照。去佶とて。和郎い木綿張荷二郎に。ぞ。何の程に赦に遇ふる。牢と喻へに。いかぜも果ぜ荷二郎い怒まる。聲を揚り立て。噫寝惚れ。畜生奴が恩と仇る密訴の返報此に。と。抜撥に光る刀尖錯ぜ。件の漢子い額と砍られて。叫苦とぞりに仰反なる。身と稍起ぜ。二の大刀に尻と砍られて。颯と潰る濃血と曳て又逃ると。遣らじと。找む荷二郎い。透さぜ奥へ踏入たり。支の闘動に臥房る。鈍梅い吐嗟と。胸と潰して。逃と。来に。賈立ぜ人と。喚んと欲れども。憶れて。聲も出ざれば。横と被りて又剥ぐ。立すくあて。平張りて。躰れ難たる。将場の雑子の良人の危窮も。身の危さに。かゝる。遑なり。程に。荷二郎い件の漢子の背門へ逃んとあたりて。艱鳥鳥の似く。趕稠て。韓竹割に砍仆る。

刀も拭いで引返さ臥房の内へ猶そぐ仮ふ鈍や鈍梅ぐ横引被ぐで弥陀仏々々々と唱へ
たる頭髪を抓を引揚出せば悶搔くと膝ふ布締てをれ淫婦奴荷二郎るを思を仇敵を
報ひい恁ぞと責れば戦く呼吸苦しげふ許しめとの聲と共ふ閃く氷の刃尖左るふ丁と探返
きて胸前禹欲と刺串けば漬る血い欲と散りて壁ふ撒りし葛丹葉野中の樗木も霹
靂ふ裂れて枯る命ある時あり虚空を抓で息絶けり然ば又荷二郎いるはの外ふ人もや在
ると四下を隈なく渉猟しふ絶て人影もせざりしかぞぐ仮外面ふ立出て透し眺め長総を招
けせ耳ふて権且入りて休ひめとふる長総い訝りねぐ引れて内ふ入りつるふ主人とおぼしき男
廿三名い那と這とふ砍仆されて猟の獲の野豬ふ似れば是い什麼とだりふ怕れて退ぞんと
せしを荷二郎急ふ掖禁めそ訝りめる這奴們い我とあん身の仇ぞれば恁い怨を復したるぞだり
ぞふて具ふ報ぎいるは訝しく思まん支の情を説示さん狭冬の夜のと長ふ暁るふ尚程
もあるべし今解諦を来歴をうら聴ぐ茶を沸しね冷飯ぐりとも索出て腹を造りて遍へ
けれ先々とのひつくもえや身を起し門ふ立て人のや窺くと那這とをうへのえかの戸を引て楚と鎖
ぐ今は夫ぐ舊の処ふ坐を占れば長総い胸安らねど獨行ぐよりるさふ土炕の頭ふゆし
よりて螢ぐりの埋火を掻起して焼着る柴の枯枝ふ花火ふ移れば要る身の久後を儘ぐ
人の自在金洒家も尻を炙らんを去向を急ぐ大胆至敵の荷二郎も土炕の頭ふ膝を找
ふ卯胡坐落着貌ふ聲を低めそ喃俺妹児聴を方繞殺しる男女三名い我とあん身あ
怨敵這頭い名をのを知らん曽根川と新阪の間ふ丁る四老を痩村るれば隣舎を
遠るぐ然ば又那衒妻い小夜二を誣る鈍梅を又那漢子い賣油児を膝松と喝做しる。
亦是這頭の獨脚児鈍梅ぐ與ふ奸夫と舊の主人皺三い最吝嗇る性るれば經紀ふ
のを身をとん入れ交りをせばりしかば村人通て凡弾して藪阪の名を屑しる鈍梅い素ふ
淫婦を良人の酷く苦るると相貌の最醜を疎まるく思ひけん那膝松と密会ひを我
も初い知ぬりしふ膝松も賭銭を好めば我身這地ふ来ぬる比より一席ふ連ぐ日もまれば

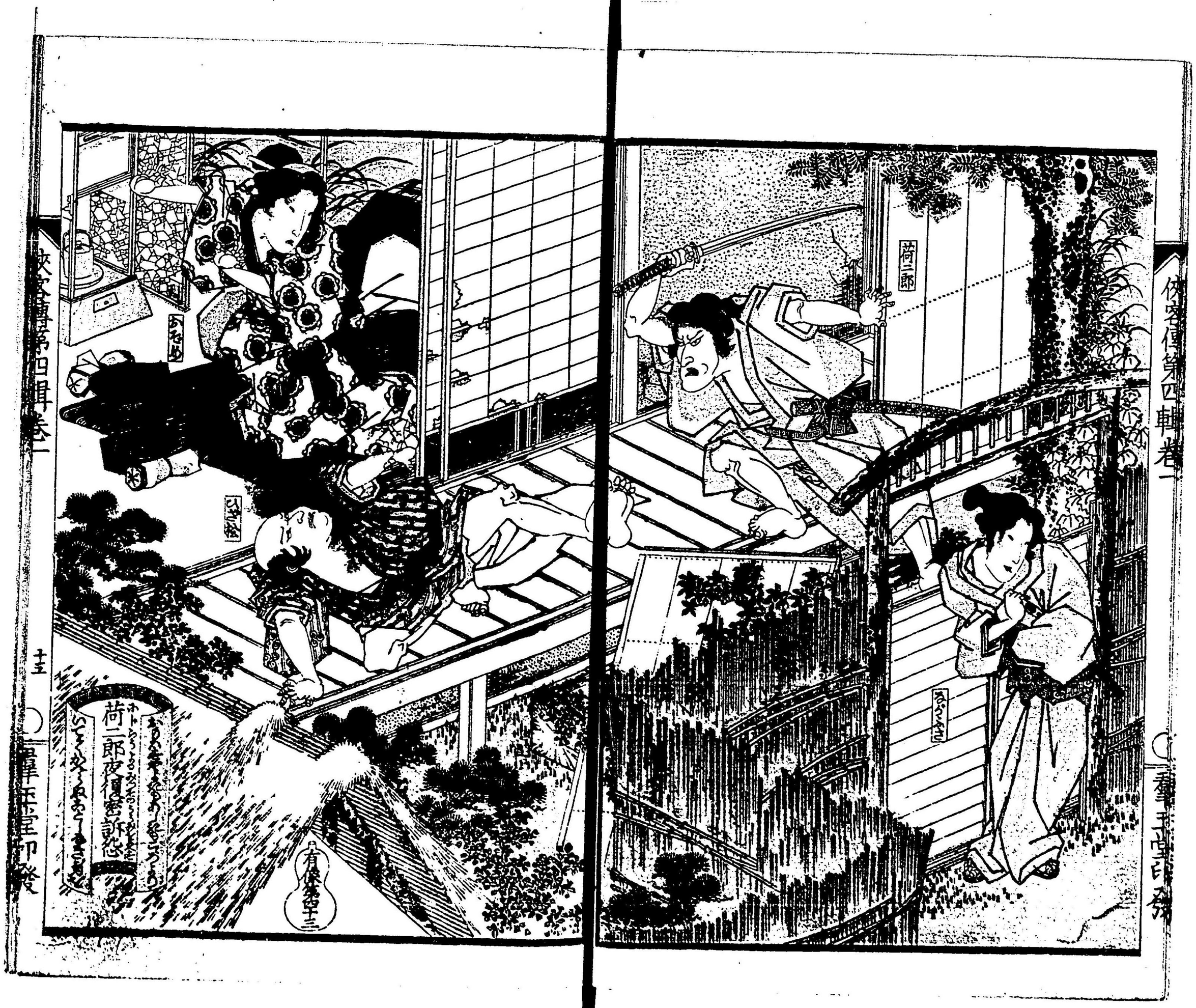
羣玉堂印發

疎くるぞ。小程ふ膝松へ有一日酒家ふ悄語くやう。和主咱們ふ憑れて我村ふ皺三と結果て
ゆくべ。辛苦錢へ小判十両程ともらへ。偽本日ふ取せん情由へ恁々箇様々々と鈍梅と夫婦ふ
るまく欲する。縡の顛末奸夫淫婦の情願を送るべく示して旨く相譚れしふ我へその折
賭へ輸けつ。那膝松ふ債もあり。素よりと分る筋ふ找と日ふ本性あれば豈も疑
議せぎ領して。あくべ左せん右しねと諜し合つその次の宵ふ這里の背門より潜入りしふ折
くる主人皺三へ猛可ふ怒りし病苦ふ堪ぎず。打俯ぐくく嘘ふく在りしと思ひの隨ふ刺殺
て。計ずしてぐく板厨ふ。衣箱をまたぬく引出して。皺三が亡骸を衣箱ふ斂て搭駝ふ折其
頭ふ置れ中刀をも搔攫ひつ走出て。小夜の中山ふ赴ぎつ。然而その衣箱へ山中ふ。山神の
廟内ふ。卸して更ふ中刀へ東へ距ること遠くもあらぬ山路ふ棄て走りしふ。亟憩ぎ小夜しを
らんが。命運竭ぎ祥ふる狡ふ曉くふ中刀を拾て衣箱を竊せしふ四老人們ふ疑まそ。
命を隕せしのみぞ。あん身も鈍梅ふ誣られて分説立ぎ曽根川ふ。獄舎ふ囚れしふ。

奸夫淫婦へ念願成就の時をゆくと狡ひぞ。幾程もなく膝松へ藪阪許後家へ入まそ。
鈍梅と夫婦ふなりつけり。然而前約のなれへ我へ那折十両金の辛苦錢をゆられども。小
後も亦左ふ右ふ賭錢ふ造化ずりければ。膝松鈍梅們へ錢を借んと。我家番神へ
豪丐たりけるふ這奴們へ推辭とをゆぎ。阿容々々としてその度毎ふ此の錢を藉したま
ども。竟へ悪支の發覚ゆくこと。やあらんと怕れふけん。折くく城主曽根川殿へ地方の
人と驅んとそ。悄々地ふ緝捕の沙汰ありければ。膝松鈍梅へ折をゆく。夫婦商量をゆけん。
有一目膝松へ城ふまゐりて。酒家ゆ騙賊ゆるよしを。彼へ密訴せしふ。我身へ捕捕られ
たり。既ふその筆を猜せしゆば。我も亦那奴們を抱て奸淫悪支の始末。ゆえゆゆへ易れ
ども。然しても我も皺三を殺しなる罪免れ難へ。折くく豫て面識よ
ば。況身へ隣接る獄舎ふ在り。憎きそも憎飽ぎ。膝松鈍梅と仇と思へ。更ふ況身を
憐愍の心も其首ふ起りたり。我へ往処毎ふ脱獄の計策を設措ぎるのみければ。

要あ折の盤纏も亦身を脱る楷梯も世やとおりへ豫まり近た山路は瘧惜る銭財を
囚見ホ〜と囚牢司の木兎六を結果る我計較首とへ〜慌々之尾ハ箇様々々なり死と辞
煩〜く解示ず長総ハ今ゆゝふ復寐の夢れ覚る如く舌を揮ふ姑くハ感嘆の聲を
沿断き慌て又荷二郎ハ長総ふ対そ我妹ハ奇偶と思ふ凍津の騙屑中山の尼
難ハ我ぞせ〜夏ゑれとも竟ふあの身の必死を拯さて両個の仇を斃さゝれ徳こそあ〜め損ま
る〜不思議の縁〜とハいまくのことふ長総額を拊て所謂を听けば過世あそ八重結び
せ〜妹伏の奇縁脱れぬ中でありけんか初れあん身が相計て中刀を葉衣箱を損る之れ変
よろ〜と小夜二郎が果敢く命を殞せ〜ハ可惜ゆで仮れとも〜ハ〜如く這身の必死を脱れて
知〜ぬ雖言敵を斃る果されハ〜ハ〜ハ〜大恩特る知智慧さ挙て世ふ捷れる主ゑ〜が久後
憑〜かり必〜と答る間ふ稍林焚沸る茶釜の湯氣と俱ふ立ち荷二郎ハ庖湢ふ飯櫃
索ひと携来て各ゑ装の茶陶冷飯一膳二膳三千世東ふ傳稀ゑ似而非胆勇残

るハけふの晝飯ふと櫃を拂ふて ゑ拭を濡と苞ふ造ら〜な荷二郎ハ納戸ゆる衣皮箱さへ
銭財さへ這那共ふ引出〜来て女服を長総ふ三ッ四ッ五ッ襲被さ〜その身を〜ゑ〜被
更ゑる有餘も銭ふゑる〜ゑハ固めて袱ふ推包を銭と金とが送もゆく腰ふ纏ゑる舞〜ハ偷
竊ふ熟て脱落ゑ兎家の東西を火速の打扮適愛さ行装やとゑ〜ち戯れて歩折
菅笠三箇縁頬ゑる柱ふ掛てありけるを心とゑ〜ゑ〜ハ〜ハ〜ハ


俠客傳第四輯卷一
荷二郎
ちようこんさま
ちようこんさま
荷二郎夜復密訴怨
有俠第四十三
俠客傳第四輯卷一
十五

所為るべし。他們は獄舍を踰たりとも。塀を乗り塹を渡りて。出るに易からざるべし。開ぎ張燈蕉火打振々々樹の蔭屋の間まで漏躲れて在りもせん。快索ひよと罵り闘ぎ張燈蕉火打振々々樹の蔭屋の間まで漏れ走隈なく渉猟るに。竟に往方は知れざりて。天いらうらふ明。時候外塹る塹の氷の上に棄てる扒墻索ありけるを。人食やうの孫くに出して。原来荷二郎長総は這扒墻索を乗り塀を乗りて。水を渡りて脱出でぬ。他領に到る程に快部どもを趕捕へよとて。その隊配どもそれぞれ猛可の事を雑兵聚合はせ左右する程に日は升りて既に辰牌なり。時候四老の村長荘客は賊難の訴あり。有司の是を訊りて。縁由を鞫るに村長は賊を禀やう。昨夜真夜半のころ。村の經紀人藤松と喚做きもの。宿所に強盜の入りしけん。屋主藤松と女房鈍梅を惨殺して。金銭衣裳を奪去る。その迹既に分明素より知せのふが如く。驛路を反田舎にあれば隣舎とへども遠ふ。そを知るよしもいつぞ天の明時候畊き者の野田舎く折に見出して。闘ぎ立るとそれが情由を往方を尤占空占ゆく。

照験とそれのいぞ。とそるく禀ぎ有司は是をもち聞く。その藤松はいあり比丘人荷二郎を密訴して捕捕せ。めんか。素より四老の經紀人なるやと問へば村長然は他は我村なる。賣油郎でぬり小妻奴子もあるぞいへば。日村人皷ぞ。後家鈍梅は入敷員なる接木児でひとのふに有司は領ぞて。然るに藤松鈍梅は砍殺なる強盜。必是荷二郎ぞん若は知ざるべし。昨夜這里の人を害して。獄舎を踰る囚徒あり。そは鄭高藤松が密訴きる。木綿張の荷二郎と長総とは賊婦を意ふ件の荷二郎は密訴の怨を復さんとて。昨夕脱れぞ折這里より躯て那里に到りて。藤松は殺せ。ぞん若は其の意を知るに。賊の徒方を索ねよ。実検使の義は聞せの程遠ふ遣べ。罷立ぬ。そは大家弁一言義して。そは退り出ける。程なく有司は賊兵幾十名なる荷二郎長総は趕捕へよとて。部と四方へ遣へ。主君はゆえ。藤松は宿所へ実検使を遣へ。衆口を聞定めて。穿鑿等閑なるべれども。時後れるるべれば竟の験なるべし。因て

當城の主曽根川權頭高春は越ふ思念と旋らもよりと京へも鎌倉へも行えゆげたんを追捕ふ送る隈もなくて賊は捕るべれども然では當家の武備ふ於て怨るふ似て影護かり。口ふの侭ふ寢べーとそ。悄ふふ斟酌あるその美と禁められかが鵠鶴いと高く飛て設の網は徒ふ野徑の霜ふ朽るけり。然は又鈍梅が前夫皺三は村ふ名たは慳貪児ふ亡親の與ふ香華院へ千蘭盆毎ふ布施もせず墓は荒ても頽れても絶て詣ることのなければ況親ふ手忌るとは。はいも出ずその折々ふ寺より促ることありても法華延ふ世話ふも没佛支ふて怠たるは世費ふる所ふ入るーと強面く答てその説と容れを親のふもう邪慳ふ一支と推て萬支ふ渉る心術と疎と果たる所親は離れ村人は凡彈ーと交るめ入るーべ他が枉死の折ふ出も身は入れて後と憐む商量敵のふりーふ甚麻をぞ勝松のと生平ふ皺三許交加ていと憑ーけふとのふーふ皺三が身後ふ幾程もなく兄弟品の好めりける。藪阪の家の與ふれがふ遂ふ氷人と哄誘て鈍梅が招贅ふかりける。人食奇談ふ甚ざるもなく原来勝松は豫より鈍梅と情由のありけるとその折通て猜せふ今番鈍梅も勝松も死ざる皺三ふ異ふ俱ふ強盜のふふ屠られと神ふふ身の誰もかもふふ隱慝の業報ふりたとよく知るのふを一個もあ〻祿積悪の家餘殃ありのと誠とふまべーとそ深く憐むのもあければ只村人們が捉ふ儘ふ件の夫婦の亡體と葬りふるのとふれども墓表と建るのもあらーと是より戸籍と除れて竟ふ迹ふくなりふけり。案下某生再説荷二郎はその曉天ふ長総と伴ふて西と投て走るとふ一日の旅ふ三河ふ程ふ近ーとそ。依京師へ赴くふ夜は長総と枕と並べ旅宿ふ樂ふと取らぞとふふれども長総は他が幇助と為ふ獄舍と踰ふる思ふ敷ふ敷ふ船の楫と絶て所寓ふ身のかふ〻ふは郎態ふ人並ふ一所不住の強人とふ今ふ推辭ふければ他が隨意枕と薦めて飽ふぞ媚と盡ふふ荷二郎はよく愛狡びて日毎ふ馬を央行轎はもうち無ーと勤ると大ふふ喜ぶ既ふ京師は到りとは妻ふ名所と相せんとふ旅宿ふるものと詭りて五條頭の飯店ふ權且逗留ふふりけり。小程ふ荷二郎は有一日長総ふ其く

櫻井玉堂印發

ぞう。那曽根川い遠江ゑ。ロい是一城の主るゑふ既ふ他郷へ走りたい怕ゑふ足ゑれども倘将軍家へ申えあげられて隈なく緝捕の沙汰あゑば這頭ふ在らんも由断ふ似ゑ。我東国ゑ騙局火家ふ潜ゑるエテもあれ河内州石川郡千剣破村の稍盍処ふ五十槌電次隆光と喚做る。原是一個の豪傑あり。并も強人の頭領ゑ名高る支黨ヨゑれども同郡の荘院民舎ゑ相敬言て劫さゑ陽ゑ武藝の師範と倡へて衣食ふ支足る郷士ふ似されば緝捕の殃あゑ年来ゑ歴る隨ふ折々他郷ふ赴て高家ふ入り商旅ゑ暑るエ昔の藤澤道ふ捷れる夜掙ゑ屡ゑるも幸ひ十て賽牛孺の刀尖ふ遇ふエもあゑ。倘他郷ゑり石川郡へ掩了ふ来ゑる倫児の那隊ふ隷ざるのあれば隆光ゑ猟合ゑて斬て棄ぎとゑふゑれば地方ふ於て盗難ゑゑ良賤各々安堵して夜も戸鎖さぎと申えゑば河内の守護遊佐殿さへ是ゑの風聞ゑ受容れて右ゑ憂心ゑ為ゑる地方の扞城ゑるべとゑ疑ふゑろゑゑ。ゑれば河内ふ赴て請て那隊ふ従ひゑば緝捕の沙汰ゑ免ゑゑ身も亦倶ふ安ゑふべ。然ばゑ故ゑゑ婦人を倶して那首ふ到らば相応ふかゑゑ疑れん因て我又ゑ尋思ゑ。ゑん身ゑ千剣破の頭ゑる飯店ふ潜せ置我先獨那里ふ出て。よく誘へて身の落着ゑ。その折の時宜ふよりゑ。妻とゑふべゑふ妻とゑふべ。倘ゑふゑゑ姉ゑとも妹ゑりとゑゑふ瞞めゑ。せんゑふゑふゑゑもあゑん。遮莫ゑん身ゑ我與ふ姉ゑ妹ゑ年歳ゑる知ゑ。素生ゑふゑ諦され後ば其頭ゑふゑも不便ゑ世と契ゑ一妹伏の中ふ何ゑふ匿ゑとゑふゑん悄々地ふ告ゑ知せゑゑとゑふれて長慈顔ゑふ被ゑふと恥ゑとゑゑ。前夫ふ薪樵ゑる鎌倉殿の御内ゑ。藤白隼人正安同と喚做る相摸の眼代ゑりけゑふ職禄共ふ卑ゑかゑ。初ふ脇屋義隆と敷る捕ゑる功ふゑる管領二代ふ罷用せられ。権臣ゑ作りゑふゑる四月のゑりゑ湯治の暇とゑりゑ。底倉ふ這留の折新田の餘類と申えゑる助則とゑふ猛者ふ主従名残ゑ敷ゑ果されゑる。不覚ふゑゑ沙汰ゑりゑ。ふ賊罪ゑ亦ヨゑかりゑゑど。説訴ゑるりゑあり。ゑれば猛可ふ来邑と没官せられて。剰宅眷と追放ゑ。ゑふ這身と措難て。投て往方ふ定めねど。獨忠義ゑ若黨ゑりけゑ。衿笠小夜二郎ふ扶掖れて。

一宿二宿と旅寝をする。折ゝ富士河の頭迄の身の騙局に拙られる。それより後の憂苦患難に豫て知れ一次第に伝へ聞夫に四十二の厄年に殺れ奴家に今茲子。とのひたゝ小雲時只訥りそたゝ八迄伝るか。と云ふ荷三郎黙頭て意に優さる身の素生鎌倉武士の奥さるも落れぬ谷川の水清ければ魚栖まず。非除濁りに従ふ。世に倫児て妻に るとも不自由さまる我あゝまの皆是過世の業因なるとは絶て恨はあれど。年に三十八 ゝんあれ酒家に一歳の姉なれども縹致よりけれどもちえあ三十とかともけまゝあゝまの総て暴 挿と做まるに常言ふに三日平氏運ぶに向ひ王侯貴人も及ばざる樂とあの找那五十 槌の隊に属て今より河内にあれいとそ二の町敵で朽も果んや尺蠖の伸んとする且其身を縮 むとへば只當分の階梯のみ。竟共一花開まべる段もゆん等のひと耳に示て慰まる。 長総听く微笑て。そを憑く伝るか。と応いあても又ゝに心のとすく出入り既に今茲に旅宿に 暮て。明れば応永十九年春正月の中澣時候荷三郎に亦長総とねて河内の千剣破に赴

く。豫て計り一言の如く長総とぞ伴に千剣破村に程遠ゝ飯店に留置て荷三郎一個 身装て五十槌に宿所に赴く名高る地方の武人なれば皆ゝ隨に尋ねも難ぎ既に その宅地に近つて。但なれば黒腰板に茅屋ある土塀と左右にする。衡門の柱に標札を打着て 五十槌電次と寫たれば問ひでも紛ふべくもあゝ門壁の内に松ある梅あり。折ゝ正月の天 なれば爛漫さる梅ゞ香の單葉に既に衰へるあり。八重に南枝を盛りと其頭に書院の庭 るべ。東の方なる孫廂に武藝の生徒の学剣所なんとぞ。ゝて連に相敲く木刀の音丁々 と伝へる。登時木綿張荷三郎に角門より找て入る。呼門と両三聲立て来る若黨に恭く 対ひ。小可に東國より御高名と景慕して御門生に願ふ。欲に慾に推参仕 る第這一義のまるゝ。亦試んと云ふ機密もあり。拜謁の折方寸に盡まらんと欲る席 時と程さぞ又出て来て卒這方へと荷三郎に客房に迎入れて茶と薦めるぞ。程に学剣の

大刀音ハ寝ふけり。少選して五十槌ぐ下ろりける。曽反鼠坊八出て来て姓名を問ひ来意を訊て小書院へ案内をなけり。當下五上槌隆光いその子雷丸郎隆成と腹心の支黨ども雲館奇峯五白鮫振平出水挺頭三们を左右ふ従へその身ハ上坐ふ布儲る。皮の裃ふ美者て荷三郎ハ對面ふ約ての為体武備逞しく威風を示して一軍の大将の降人を見るふ異ならねば荷三郎ハ思ふ倍るる威光ふ憚りて只平伏るのみなり。隆光やよと喚かけて和主ハ東國の人なりと欺我弟子ふ為らまく思て訪れ来る既ふ少あれ相識人より紹介の書翰を受察しると問へば荷三郎否紹介の書翰とハいひながら小可郷ふ或人ふ君ぐ機密の趣を具ふ偽り告ぐ。最莫大ふ倍るる。隆光ハ推参仕る人ぐ先小可ぐ素生も告禀せべく君ぐ機密の然るや不ら問試なるん左右を退けるなかと。隆光ハ人ぐへぎての談るぐ遠慮ふ及ぶぎ我一家児ふ在る者ハ炊妾奴隷ふ至るまで一個も腹心ならぬる。況這里ふ侍る人々ハ拙郎ぐ塾生们ぐ何ぐ敢ふとあんぐ快ち出ねばべ。と云ふ荷三郎勝ぐ找めて。あらぐべ愚衷を盡ぐ。小可ハ東國ぐ年来騙局を宗とあれば些の夥計もひ。ぐ皆旦足烏合の小輩ぐ或ハ捕られて首を刎られ或ハ他郷ふ離散して夫歳を夏ぐ我身一個遠江ふ赴て曽根川の城下ふ在りふ知音の為ふ密訴せらまく城主の緝捕使臣ふ捕捕られ繫ぎ獄舎ふ斃されまぐ。索の断離れ吊桶ハ等しく又出づぐくもあらぐ。逆准備ふ及ばふ。ぐ逆准備ふ及ばふあれば瘞笛の計畧ぐ。曽根川の囚牢司ぐ一夕窃ふ刺殺して遂ふ獄舎を踰ぐ。ぐ密訴せりの宿所ぐ赴て主人夫婦を斃す果て。那宿限ぐ復ぐ。徒而京師ふ赴て春を旅宿ふ迎へ。かも西ぐ相識る伴もる。君ハ我黨の大将軍ぐ富ハ昔の金山ふ倍るるぐ。挿了ハ他郷のまふ。地方の與ぐ害ふ外ふ来ぐ。偷児れば食べて斬棄のふ。まぐ。鄙語ふ云ふ龍蛇の路ハ蛇ぐ知る其術精妙現長久の計ひ和漢未曽有。今昔无類の豪傑とぐ。ぐ因て。ふ小可ぐ。騙局の與の智嚢ハ長の知れる刀子細壁言ぐ一舛入る瓢ハ一舛の外入らぐる如。五指の迭

代ふ彈んよう。一養ふ優とる。世ふ立ようべ巨樹の蔭葛藤児ふ巻れよとの世話さへあるふ今よりあこいろでかんるふ従ひて一挿たせば緑林冥加ふ稱ひもせんと訪ひまゐりーふ客を愛ひるあん胸寛くあくあん見を賜りーハ悦び何事ぞ是ふ如んや。然ば良縁虚ーかーで願ひの隨ふ做ーゆうべ。適死力を盡さべーいろで兼引ゆひかと舒る聲音の東訛も有數ふ外を憚ひて高かねぬ委敬辯舌天ふ拙言ひ地ふ盟ひて赤心を示ふまで一癖あるべ面魂宣ふ一人當千の本支を必あるべーと思ひのふりけりそゞ中ふ隆光い听々ぞく領ひているる趣その意をるう既ふ我武名を慕ひく機密も伺へゞーとあれば推辞べたふあーねども知音の紹介を故ふ速ふ美引かたかり。約莫我隊ふ属まく欲ーと初て這里へ来るゆふ非除知音の紹介ありとも投名状を晋呈せばれば留ることゝ允されぞ開も亦あるるゆまれ狡と問れて荷二郎然ひその我ふ美知住ばそいるふ寫めるん教さをゆかーとふと隆光ち笑ひて徐ふ左右をとかそ。汝達件の投名状の趣を示ーねといべ大家阿と応る。中ふ一人找出荷二郎ふち對ひてあゝ木綿張力祢ふ

ん。初て御意を得ゆ。咱们い當家の老門生雲舘奇峯五と喚るとの目今向れー投名状ふ筆硯をて做めるゞぞ。抑我老先生ふ隨身の志願ありて初て這里ふ来るゆふ見參の贄とて約當郡を除くの外或ふ隣國他郷ふ到りて單身ふーと。豪家ふち入ゆ或ふ商旅を剪徑ーく。金銀美女を獲こ先生晋呈をるゞ。投名状と命けくう。その執貫の佳ゆ。ゆへ。躰て股肱の刻ふせるる力其首まゞで至らぞとも遇ふ儘ーと行客を砍殺ーと盤纏を俱ふ首級を実検ふ入れまゐれば。後々の執贄とせられて股肱の刻ふ入られねども。隨身を充る。恒例都てかくの如。因て投名状の與ふるゆ。山城大和二左国ゆ。その路近ゆ一十許里遠ゆ二三十里ふ過ぎれば往還七日を限りとを出て七日ふ及ぶゞ。投名状を晋呈せぶれば是則縁なを速ふ他郷へ走りて重て這地ふ来べくゞ足下這度を能せるやとのられて荷二郎沈吟まる。肚裏ふ思ふ。我ハ騙局を宗とまれば。年来美女も財宝も畧奪るるゆまれども。不知案内ある里ふ遣られて。揮んと欲るふ往還絶ふ七日ふーとゆふ入ーんと心のとれー。倘能せぶれば是非もるー。更ふ他郷ふ赴ゞて。

羅玉堂印發

騙局で一期と過さず過さんとす左も右もの口ぐち逆杏と這里へ来ぐら投名状を果さぬ。と。
そ依影と躱せーるどいられて後指と差れる最朽とーそるるべ要とあと立地ふ孫思とあ
ゥ。莞尓と笑へ。投名状の趣い初て美知佳め何吉奉ゥと思ひれ。その義ぐが難くもあらぬ七日い却閣
ゥ明日ともひつで小可その義と能をべ。とふふ大家訝りと言男ーふ似れも投名状をその自中ふ果ーる
めれわぐ。鬼神不測の術ゥ。似而非廣言ふあぐぐと呆ぎと面と照ぐまぐふ傷痛くらけり。

第三十二回

暴論親を勵して雷九郎龍潭を拐る
夜殺氣を察して姑摩姫群虎を表ぐ

登時雷九郎隆成い特更ふ惴雄る。後生の癖るれば恢へぐ荷二郎ふうち對ひて。木綿張
刀祢某い不肖るれぐ。主人の獨子五十槌雷九郎隆成と和殿目今投名状と明日とも等
たで能せん。とめれーいあるるるり。神出鬼没の妙術ある狄その所以具ふゆまく欲ぐと。詰るふ
荷二郎怯る色ゥく。原来和君い老先生の令郎ぞそうーまぐーるる。小可ぞ神仙飛行の劍
術とゆるるふあぐぐ。又投名状ふ日限あるぐ。前知ぞ准備をるふあーねど。小可衢ふ曽根川城ふ。
獄舎ふ繋ぎれるーー折脱れ出るぐ這地ふ到りて。當家の下風ふ立でゃと。ゆふ田舎のあーーふ有一タ
獄舎と喻る折隣れる獄舎ふ囚れる。一個の婦人と奪畧て俱ーと當所ふ来ぐ。そい初見
参の牽生物ふ。老先生ふ献ぐ手ぐべ。と豫思ーす志ふあれい取も要さぐ投名状の執ふ充
べのふあぐぐ抑路ふ人を害ーと。東西と畧るい還て易く俱ふ囹圄の中ふ在る。婦人を奪
ふい極めて難ゥ。恁れば今ゥ七日と限ゥて。他郷ふ暫と渉獵んゥ。件の婦人を投名状ふ
做さば捷徑ふゆまぐゃ。とふふ大家笑局ふ入りて。そい又奇紗ゥる哉俱ーたる婦人い何列ふ人
氏ぞ年い幾歳ぞ縹致い甚麽と問ふと荷二郎ゥ。件の婦人い民間ふ人と成るるれるー
ぐ又私窠嫖娼の類ふあーぐ。鎌倉管領家の寵臣るりける藤白隼人正安同の室るーふ。
那安同い新田の餘類助則ゥふ猛者ふ主従名殘ゥく殺るれる。不覚れ外めふるるぞ。その迹を
ぐ剣宅眷と追れーゥ。那内室い只一個る。伴當とゆて覚束ゥく。京師路投てゥく折ゥ。

その伴當が倫児に似る疑ひを稟ーるに。那身は薄情や近邊遠の村人們が數る殺され王邦は婦人の捕捕られて久ーく獄舍に繋がれ。その主従が寃屈の呵責に原小可が四老村る。嬶夫淫婦に憑れて。外に薛子と移さんと棄てる東西と。那伴當が拾合る越度に。小可這度と後悔して。憐愍の心も起りーに我ーと云云と地方の城主に許て捕捕せ。讐敵に。件の嬶夫淫婦們を。恨を晴堪ぎ逃脱の計策を旋らして。既に獄舍を脱る折。その罪る婦人と拯て。嬶夫淫婦と殺ーたる。件の婦人に稍衰の花も。年齢に二十八九。二十ふ。ゆゑ。ゆゑ。なれども。漂致に世に捷れて。めくらひざる辨才あり。走筆いと愛ーて。縫刺の技にへ。ゆゑ。詩歌管絃の技藝まで学び。ゆゑ。とみづーるに。その名と問ーに長総と曰ふ。ゆゑ。結ぶ。便りあるに似る。只是奇貨とおいまくの。這廂の東西とも。投名狀の帳目。只今濟ーあらーに幸ひ。これも優とあーど。と唱く辯舌奚に。奥を添て。説誘る。隆光つらく。ゆゑ。聞て。連に嘆賞の聲を。絶ぎ。猛可に。貌を改めて。思に。慢る人。才幹。その身。獄舍に。

繋れ。と脱去るに。即智。その罪る。婦人と憐ーて。婦人と極ーに仁。その折に那恨に。嬶夫淫婦と殺せーに勇。又美ーに婦人と獲ぎ。そと。遊女に售もせ。みづーに犯ぎ。に是則信義。況件の美婦人。遥杳我に贈んと。ねて来ける。礼。忠。義。の仁義。八行を一箇。も。に。に。我當黒に誰。あーん。且目今。れ。ぎ。前程。と奪に易く。囚徒を極に難り。言の趣。その意。ぎ。快。その婦人を俱。て来ね。役に立べ。めるべ。隨身の。に拒障。ーど。て。荷二郎。怡悦に堪ぎ。その辱。と。に先見。参に入れ。ーん。姑。もせ。ねと。応て。賊。衆に。揖。ーく。遽。く。旅店。そぞ。退。る。却。説。木綿張荷二郎。に。鄙に長総と。留措る。飯店。走。還。て。長総と。額と。合。て。相譚。と。半晌。許。那五十。槌。許。赴る。對面。首尾。箇様。々。と。投名狀。の。難題。で。言。遂。も。く。其。報。て。己。身。の。與。面。伏。れ。ども。往。還。七。日。と。限。る。隣。國。他。郷。に。網。を。張。て。前。程。を。克。と。做。ぎ。ぞ。容。られ。ぎ。這。地。に。来。る。甲。非。も。く。後。々。までの。ように。羞。に。進。退。其。首。に。谷。けれ。ども。已。と。ぞ。ぎ。尋。思。と。決。て。箇。様。々。に。説。

課てゐん身をもて投名状ふせられんことをとこゝろ。ゑんでゐ成就してねて来てゐせゝられる二世と契を
ゐ挿頭の花を欲寓の與ふ阿容々々と人の眺めふるをとゝ最朽ちに限りられども倩交と安ちるふ
件の五十槌父子を仆ち我五代と頭領ふ做登らんとも亦ゐ身の心ひとつふゐ。什麼ゐの謀と業うくやと
問ふ口説つ誘れ長総ハ口呆れ果て速ゐい答難くうけ。肚裏る思ふ我身いるる過世ちけん富
も栄ト良人ゐ添ふ遂ゐ家絶果ても小夜二郎と共侶ふ世を渡ぶ樂くて慰ゐと灵くうんを。
慙や小夜二の禍鬼の出ふよりて命を殞ハ我身も縲縛の艱苦ふ遇ふて冤枉の責ふ死ぬべくと採られ
人ハ冤家ゐ而も騙賊の猾長られども。後ふ禀くる恩あれが意ゐ身を儘せ又強人の頭
領へ牽出物ふせるハ。産霊神の僻支狡餘ふ人ゐの入過ぎる。薄命ぞと思へども否とうづられ
ん憂目ふ遇ん狡測亘ふ。柱て權且ゐの試ふ就て又せんゐのあるやせんと思ひつゝ涙吐る眼
包を拭ハ嗟嘆て。偶縁を結びる。ゐん身ふ果敢ゐく棄られて見もせぬ人の妾ふせるくゐぶ倒ふ
死と別れん哀ふより。八倍ふ倍る恨られども。我身一箇の心ゐて後ふゐん身の發祥ゐ階梯ふる

よりもゐぶゐを切てゐるふ甚麼る情由ふ示さゐゐと問へば荷二郎聲を低め然ばとゐるゐ
られ。ゐん身が縹致とオゐゐ。一ぶ那里ふ到り長。側室ふせられ正室ふも。做登らんと疑ふ。ゐの勢を
ゐるゐとも。心ふ始を忘ぎて。舊の如くふ我と又夫婦ふゐゐまく歩ゐゐ誠心のあるんふハ諜。合を那父
子を。悄ゐ地ふ斃を計較ハ今ハ。ゐをもいゐくもあゐん既ふ件の父子を斃て。我身ふ威勢滿ゐぶ。骨
董児毎ゐる下ふ做て。ゐん身を妻ふ做ゐる。裏の東西を合るゐ易ゐ成るまでゐられても洩
ゐゐふ秘ゐゐと耳を援ゐて耳ゐを。長総与ふ冤ふゐゐゐゐゐと危を計較ゐ。何時を限ゐと知られ
ねども。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ洩ゐゐんゐゐとゐゐゐと荷二郎ゐゐゐ商量整ゐゐ。快を准備を
ゐゐゐゐゐゐ。ゐれば長総ハゐゐゐ。頭髪を解ゐ梳りて更ふ化粧を做を程ふ荷二郎ハ
去歳の冬膝松鈍梅を殺せ一夜艾奪畧ゐる女服の已の時ゐを這那と樺ゐて被せゐぶ准
備を整ふれば店小二ふ房錢を還して躰て立ゐて俱して五十槌の宿所ふ造ゐる隆光を
舊の隨ふ奥へハ退ゐぶ奇峯五们と酒ゐち喫ハ。木綿張の噂をして在りけるふ荷二郎ゐ那婦

道を長くするそちが為の
長總見引謁隆光
よる夜の秘やかひるま
ちり平
モヤ八
雷たらたら成
ちりちりたる
ふり三
ふり五
ちんき
有象第四十四

る人を招て再来うと呼ばれ喚ばれて對面を登時荷二郎は恭しく隆光に對して衙に愚衷を畫する投名狀即他の名狀を見るに隆光合笑るに長総と熟看て適愛を投名狀低て高毛も疑念なし。木綿張は今日より股肱と憑む者れ先恋を取せて長総とらんも介意なせそ俱に這方へ找ねと連の招に近つけて躯て不恋と與かけり然が雷九郎と首として奇峯五鼠坊八振平挺頭三の同悪仲も又改めて荷二郎と向後と契りて和ぞ酒宴酣に既に時候隆光は長総に筑紫琴を望きに長総推辞に由もなく推居られる琴操將を浮る雲の富貴組は初老女の拙技合奏調と紛を聲は稍衰の花に鳥藪莺の已が隨に囀りとは一引の山豪の耳は新ぞ。孰る佳境に入るに炊奴仲小嘍囉まで。庵漏の方より出て来て紙門を隔て听くもヨマる低て日の甚暮れ更闌て泥の如くに酔倒れ隆光はさのまとそ稍不盃盤と收めて辞て奥に退る折卒や臥房を規せんとそ獨長総と携けり以ある隆光は御に其の妻世を去て寂寞の枕寂しかりしに思ひわく趣ある妾を獲さりしに既に年才長ける其の子雷九郎は羞ある遂に夜を始として長総と俱に睦る他は素より淫婦と房事は鎖鍊を男子と蕩る段あれば隆光は愛憐て巫山の雲楚臺の雨は月は隠るとも花は零るとも低る眺めは優とあるとも思べ其のようとひとりて呼ばざるとく幾程もあらず推登て後妻は家事を改てからくまで威光あり荷二郎と見るとも宛奴僕は異わるを朽をいるヨマれば荷二郎悄地は恨を原来長総は恩は背て上人の衣領を着るあるん然とは思はるる比密談をるとさあると倘頭領は報もせば我身の安危其首は在りいはせまと歯を切て胸は焼く火の憤を洩を

とと再思は旋まは長総は這日屬我はいで尊大るは人の疑ひを容れとて故意強顔く以做るべし然ると性起りて他を怨まば婦女子は劣る後悔あるん短慮の功を成かて愚痴へけりと生悟て胸を鎮めて色も出さるは老実は事るめる長総は意は分はあるば荷二郎はその身の與は再生の恩あるは似れど小夜二郎は枉死るもの身の囚徒とする

も初を推せば荷二郎が澳津の歌店の騙局を起したる後も又孽を積んでる怨を思へば思でも況他人面も脚も舊瘡の迹のまゝ山猿に似たる醜郎なるを妻と喚れ夫と稱て長く光陰を銷られんや。渡世に於ては山豪でも五十槌主に苦味ある郎態凜として旦一隊の頭領なる面影物のいきあさへ何処やらに前夫藤白主水なるのまゝ年の齢も少らで增さる那木綿張に比れば五六歳可の兄とは面れど然とも老朽なる身なれば今は何を不足なしとて二路懸るよりあんやと以へば鄕に荷二郎が示せし密策を根念せる他をなると奴僕の如く最鷹揚に奉動へども有數糸に吉凶の破れと怕れて荷二郎が廂庇を借て母屋を奪んと欲する那計較の趣を隆光に報もせば左なきも右なきも機を撹て狐媚を逞しくまつらば隆光なる惑溺なるその身に他鄕へ夜掙に出ざるの子雷九郎隆成なる下の衆賊を從へて折々那這遣なるその吉の趣に第五集五の巻の首なるを見えたる如し。看官前後の照應に意を屬べき所へ間話除煩に程に春に行夏も過ぐる是年の秋七月の時候五十槌雷九郎隆成に雲館奇峯五曽反鼠坊八白鮫振平。出水挺頭三木綿張荷二郎們と倶に二十許名の小嘍囉を率て夜掙の為に大和路へ赴たるが。捌月の初旬に於て那地の首尾を報ずば隆光に勞んとて。次の宵酒宴の席を開て。約莫五個の股肱們に小嘍囉なる酒を喫して大かたるを待ければ不要の數巡を隨に迭に勃勇武藝に誇て。辨論口角をなるもあり。隆成ヤヤと推禁めて各位さのゝ自慢を考へまるを。今番大和路の夜掙も這頭顧員數に比べば誇るべき獲のなきに然るを恁我大人の酒肉を費すのを思へば俱に恥ぢとるべきと宵話て貌を改めて。登時雷九郎隆成に對て向も諫言せるとも用ゐられず。甲非乙可と呼ばるゝも已に夜掙の家法に河内の住居の圖郡なれば豪農富商ありとへども一度も犯すの故に地方の民に愛敬せられて緝捕の禍なきの遠慮人の及ぶ所その理あるべしと。そも亦時宜なるべし。這里より程遠からぬ莊院に九十姑摩姫と雪

えゝ。楠氏の餘類を。正元の昔見るゝと。誰とも知られぬものゝ。且世の風聲に隱れもなき他の男魂あり。父祖の怨を復さんとて。悄々地に京師に赴いて。室町の御所に偷入りに成り。頭を刎られべくゝと幸ひに赦に遇て。剩嵯峨の仙院より。金千兩を賜ゝり。却室町殿より。楠正直主後見ふして。故郷に還りぬと。守護遊佐主が五月の比ゝ。件の金を見あべ。那姑麿姫が刑餘の孤兒。武藝胆勇ありとても。長の知れる国秀。我們那里へ夜襲して。件の金を奪ん。その事後ふ。あるとも。室町殿を仇とし。寇ひ。めれば。良民の召されと同じ。守護遊佐就盛。ふも是なり。斟酌ありて。緝捕の沙汰ふ及べゝ。低れば後安ゝ。天の與ると取れば還て咎を受るとゝ。古語もありとゝ。ゝ。任辟近き。崇ゝん東西と。合ゝて。猶遠く。渉獵ふ。ふ。快々。起ゝ。と。席を拍て。説薦ゝ。隆光聽ゝ。頭を掉て。その説決して。无用。尤和郎。那姑麿姫。と。罪人。是女子。ゝと。再生の恩免あり。故郷に還りぬと。室町殿。侮りかゝ。思食れ。那叔父正直主。後見ふして。動靜を。覘ゝ。件の

妙。萬夫不當の武藝。長ゝ。我們。殺。捕ふ。室町殿。も。倒ふ。胸安く思召れん。況當國の守護遊佐主。物怪の幸と。思べ。然。人。憑。毛。吹て。疵を求め。後悔。首。達々。已。制。隆成。呵々。ゝ。ゝ。女。麒麟。老。駑馬。及。大人。遠慮。酷。過。見。豫。計較。ゝ。那莊院。光景。密々。覘。其頭。人。噂。ゝ。姑麿姫。仕。若黨。僅。一名。餘。奴隸。農僕。或。婀娜。炊。妻。ゝ。級主。少女子。一人。當千。勇。寡。衆。敵。克進退。約束。暗號。定。前後。門。負數。盡。稠。姑麿姫。面。臂。防禦。進。擊。捕。疑。議。任。猛。説薦。梟雄。勵。隆。光憶。太息。吻。然。猶且衆議。憑。四下。和殿。今。聽。如。享。利害。見。大家。阿。拒。又。隆成。意。窘。めゝ。俱。醉。癖。深。及。那。異口同音。答。

やう。小先生の軍畧。皆悉その圖に當れり。非除姑麻姫勇婦なども。我們の亦本事あり。勝負を人に譲んや。思ひ立ての人かの力と彩て必勝の大利を俱に仕んとの隆光默頭でもう〜んの我も亦俱に那里へ赴いて。進退の指揮をせんの案内を知るを要とも。間諜児を遣して。よく虚実を探らもべ。とのお隆成やあぢその美はれ。ろう安ろ顔。児逆那荘院の光景を覘ひて方位廣陝悉寫一合する縮圖あり。是を面せと懐より。出す件の繪圖一張を。親の身邊おから開けば。奇峯五湖坊振平挺頭三荷二郎も燭甚臺の下に弁一膝を找ぬ。親く連りに隆成の用意を賞讃しうけ。その中に電次隆光の扇と合て件の繪圖と。那這と指示しく是れ前門の内に又後門の秀と子に當れり。東向に矮樓あり。又庫藏の後と前にあり。這餘の具るねどの假山金池庭の樹柱の漏に限るくよく圖りなる。前門より我們父子并に雲館曽反白鮫ヨ勢を找ぬ潜入べ。又後門へ出水木綿張十四五名の下とれて。暗號と達ぐ探合に勢ひを脱くべくぞその夜の拵に凝滞なく。思ひの隨に勝に無るとも人を殺さと功とせざ。只那化貨財を極攫ひく。快退くを至妙ともべ。餘の機に臨に変に応じく。よくまぬと老煉の提調に大家感服に美名と。応ぐ。舊の席に退くにぞ隆光に改めて。不無又巡らしる酒宴奥ある前祝の現強人の當喫も。吹擂猜拳閙しく中に夜船を漕ぐもあり。羽目の命いまく波や立まく惜しに固坐さ是欲海の底ま一高量沙量も杯子も推並て。竟に天の一網にかゝる毒魚のこれかゝに酒菜呈奉しに身代に裏と返と骨を折る異日夜倫の商量を。辱てまぐに酔に。却説その結旦番九郎隆成にその身の意見を稍聴されに心勇まで。雷時もあらぬその夜の人数を定んとも。五個の股肱門を促に共伯に親の身邊に赴いて。隆光ぬから眉と顰めて那姑麻姫に武備に疎ろる農戸坊賈と同じかぬ。ろのに。ぬで近邊に那叔父正直の宅地あり。倘八九の荘院に夜撃に入りぬと。ぬ知らぬ士卒と找ぬ我當麻を。撃捕らんと欲もべ。然ぐ前後に敵を。進退難弐に及ん。孫其頭の准備いかにぞと。問べ隆成微笑てその気の豪ぬ。那正直に姑麻姫の叔父あれど中に分り。不和なるとも室町殿より後見せられとも這義に。

推量するに夜襲するのこのぢあるとも正直決して極めべき事なれども其の途に山川あり樹木たちまち束ねて
来るとかさるべしとの事なれば隆光うち頷いて考へとも人数を増て肩小心に考へとる一近邊に分處
らるる甲乙にも徇知して人咸汰で共侶に今宵更闌て襲べし時日を延さば計り畏の洩まさん悔
考へとあらん快々せよとのそせば隆成のよく拵で小嘍囉を走々しく那這に分居考へる下に草賊を
聚合へ支の准備を做す程れ這旨も既に其春れ五十槌父子と五個の股肱に身甲に肱鎧
臑当考へる器械を引提る。這餘相従の小嘍囉まで鎧袖衫を弁へ被竜で腰に各山
刀を跨へ或は角弓に矢を番へ或は墻索竹槍捍棒隱形把火塀槌を肩に考へるもあり。打拾執る物を考へ
准備既に整ひ長総の甲夜に入る。炊奴をして五十槌父子その隊の賊に戦飯を薦め
利運を祝して潜やかに目送りける。偖而五十槌電次隆光に是夜の中の比及ち先ず下の小嘍
囉五名六名宛出し遣りその身父子五個の股肱に共侶に徐ろに八九村へ赴く程に子二刻時候に
なりぬれば登時五十槌隆光に八九の荘院に一町ばかり這方なる茂林蔭に衆賊を聚合へ着
到を検考に約莫三十五名あり。即便これを二隊に分ちて二十個の小嘍囉に隆光隆成頭領なる
奇峯五鼠坊に振平を副頭領とし這它十五個の小嘍囉に槌頭三郎に荷二郎を両頭領と
考へ後に従ひ找む部既に定めて槌頭三郎に荷二郎に其の隊の賊徒を従へ先ず投火に赴かけり
姑且て隆光に梁渡念珠七八艘乗蚤介と喚ばる両個の小嘍囉を召近着て若衆に墻を
踰闕隙に鑽る長るるに快姑麿姫の荘院に潜び入り那這に火を放ちて前後の門を開く
べし。ちるる狂とくあれとこれ一方に念珠七蚤介兼りに身を起して荘院を望て走りける。左
右考る程に夜に紛れ近き荘院に暗踊の火も発ちぬ然りとて件の小嘍囉ども木
ぶれば虚実も知れず大家大く待不樂で他に日屬に似けもなく今宵の暗踊のと凝さよに
表ん喧けば雷九郎焦燥て鄙語に曰く鈍る良人を等び茶も冷る這里に物を思んとす
我身みづから潜入て快火を放て暗號をせんにとのたまへども走去んとせけるに隆光を忌て推拭て
和郎に本事に覚ありとも後生の單身に虎穴に入んに極て危しいかんとるべき考へに熟る一個の

墨華堂印發

老兵を伴ふべしとの鼠坊八我先を願ふ在下小先生と倶ふ先登仕んとの言を隆光不かりて和殿隆成と相資て那里ふ到らば支成りん。言はよく小心者のかゝる屬るを鼠坊八を心も果ず隆成後まで走りけ。佐り一程ふ後門路へ潛寄る挺頭三荷二郎們十五個の小嘍囉を引出めて左右るくいらちも入ゝ老豫期なるよりもあれば内より暗踊の火の起るを今かと待ちけるふ丑三ゝんとおよふ時候まで萬籟聲なく寂寞たるふ心疑ふ相其れて今まで暗踊の火ゝ見ぬ必是故あるべしとの荷二郎沈吟ゝ然ども前隊のゝふ人を走らしめ問ふとせば怯れるとのられもせん我先獨潛入りて内の虚実を覘べれ今ゝ躊躇ふるゝ良ふ悄語てゝ如墻索をうち掛ゝ登りて内ふ入ふけ。小程ふ五十槌電次隆光ふ雲館奇峰五白鮫振平們と倶ふ潛ゝ隆成們ふ暗踊と等ふ是も亦ふ功を見ぎらく深る秋の夜の月ふ光ゝ瞻仰て惆然とゝ嗟嘆ふ堪ず衆賊を伝と見且も念珠七番介のゝ雷九郎と鼠坊八を倶ふ暗踊を錯へ生拘れ狄數あれ狄支の安危を思惟るふ凶ゝ吉少ゝ然ども今ゝふ他們を棄て何容々と退く能ず我

ゝ入ゝ我見の安危を看定て大家立ねと焦燥る提調ふ誰ら礙說ぞ然ばいたゞとの隨ふ隊伍を乱ゝ莊院の前門ふ椎寄れば先ふ找ゝ小嘍囉を扒墻索を打掛ゝ潛入るの両三名共伴ふ降立て角門の片折扇を開けふ大家れふ便りを得て弁一内ふ入庭門ふ竹の両折戸ふ半分開てあり原来我見もの餘の者も這里ふて入りつゝ這方へ找めと低語ゝ先ふ立ゝ入る程ふ忽地物ふ跌ゝを訝りるゝ小嘍囉ふ隱形把火を秉て相まべ是則異物るゝを。安慰やるふ鼠坊八ゞ屍體ゝ韓竹割ふ砍らまたり。倶ふ駭く衆賊ふ向ふ隆光連りふ嗟嘆ゝ思ひ合れば我見も性命心と四下をゝと遽ゝ找む庭の樹の下或ら池の畔書院の這方ふ念珠七番介二名ふ向ふ雷九郎隆成も身首所を異ふせ鮮血ふ草葉を浸ゝ這光景ふ又駭く衆賊を励ま隆光ら齒を切り眼を睜ゝ朽ゝ哉鼠坊八們二名ゝ我

第二巻五の巻のてはふ物語主腰ふ[illegible]れて後ふ[illegible]ふ[illegible]と[illegible]郎這[illegible]冬看官前後を照[illegible]べし

こ
児まで。殺るせ。怨い九の世を易るとも忘るべ。今い倒潛ぶ堪ぶ。快打破く綢入りた。
姑麻ゆ姫主僕を生拘ゑ。殺るまーめ。竟を祭らん。後まとゑ。敦南ゑ。聲共侶ふ
奇峰五振平二千許名の小嘍囉を。找めく。咄と入らんとたる。書院の兩戸を東北隅の。
絶ふ一枚開けくあり。群賊其首ゆを目もかけず。塀槌をのろく兩戸四五枚一度ふ敲き折
破て。綢入んと競ふ。縁頰ふ。徨然と立る一個の美女あり。短刀を引提て。外目も恥らぬ奇
俠の胆勇。内強く。外弱き。閨衣姿の仮ぐ。乱さる。繻子の帯。長き袂を那
這と。結ぶても。翠微を。柳の腰ふ。輭竹の雪の肌膚。ゑ。絲ども。化粧つぐ。清き
月の眉花も。実もふ。容貌い。問でも。ゑ。姑麻姫ゑ。ん。猜。ぐも。草賊们ゑ。
不意を打まく。阿とぐりふ。斉一撥と退さる。毕竟。の折姑麻ゆ姫ゆ。防戦の勝
肩へ。其麻ゑ。そゑ。這回の題目と。有像ふ。ゑ。知ふ。

開巻驚奇俠客傳第四輯巻之一終

124
25
15

2/12
2/12